バドミントン競技におけるリバース・スピン・サービスが禁止になった背景

―1980 年代の IBF の動きに着目して―

濱谷美希（奈良教育大学）

Ⅰ．研究目的と方法

1978 年 12 月に行われたアジアバドミントン競技大会で，リバース・スピン・サービスが中国代表の湯仙虎によって国際舞台で初めて披露された．しかし，国際バドミントン連盟（IBF）によりこのサービスは約 3 年後の 1982 年に IBF の年次総会で使用禁止が決定された．そこで，本研究ではこのサービスが禁止された 1980 年代の IBF の動きに着目して，当時のバドミントン界がどのような考え方をもとにこのサービスの使用を禁止したかを明らかにすることとした．

そのために，1980 年代に発行されていた『バドミントン界』（日本バドミントン協会発行）や『バドミントンマガジン』（ベースボールマガジン社）から記事を取り上げ，バドミントン界で行われた変革の背景を明らかにする．また，日本バドミントン協会の議事録を検討し，IBF の通達を資料とした．

Ⅱ．結果

考察の結果，本論で着目した 1980 年代に IBF はバドミントンをオリンピックの正式種目に採用させるために働きかけていたことが分かった．そうした事例として IBF による試合のオープン化や世界バドミントン連盟（WBF）との統一が挙げられる．オープン化はオリンピック正式種目採用の条件である普及度を意識して行われたものである．また，台湾の除名問題がきっかけで分裂した IBF と WBF との組織統一は，台湾問題を解決させたいという証であり正式種目採用に不可欠な事項であった．このことからも，当時 IBF がオリンピックを意識していたことが考えられる．

このように IBF がオリンピック正式種目採用へと動いた時期にリバース・スピン・サービス使用禁止決定も行われていることを本論では着目したい．

そもそも IBF は，リバース・スピン・サービスの使用を禁止した理由として「バドミントンの本質を害し面白みを減ずること」と挙げている．当時，IBF の役員の半数はヨーロッパの国から選出されていた．では彼らの考える本質とはどのようなものであろうか．バドミントン発祥の地であるイングランドで 1980 年に発行されていた『Badminton player's diary』（イングランドバドミントン協会発行）を手掛かりに考えると，少なくとも 1980 年代のヨーロッパでは，バドミントンの本質を勝ち負けに拘泥せず正々堂々とした態度でゲームを楽しむこととしていたことが推察される．

しかし，当時テクニシャンとして有名であったデルフスがレシーブの際にノータッチであったという事例からも分かるように，リバース・スピン・サービスはラリーが展開されにくい技術であったことが分かる．そのため，当時の IBF がこのサービスはバドミントンの本質と相いれず面白みを減ずるものと判断したことが考えられる．そして，このバドミントンの本質に相いれない技術が，当時 IOC にバドミントンをアピールするにあたって障害になると IBF が判断し，リバース・スピン・サービスは国際舞台で披露されてから約 3 年という短期間で使用禁止が決定したと考えられる．

Ⅲ．まとめ

本研究では，リバース・スピン・サービスの誕生から各国の反応や禁止決定までの流れをまとめた．さらに 1980 年代に行われたバドミントン界の変革に着目することで，当時の IBF の動きの考察を行いリバース・スピン・サービスの使用禁止決定の背景を明らかにした．これらの背景を考察した結果，IBF がバドミントンをオリンピックの正式種目に採用させるための動きの一環として，リバース・スピン・サービスは国際舞台で初めて披露されてから約 3 年という短期間で使用禁止が決定されたと結論付けた．